

# 全学教育科目に係る授業アンケートにおける エクセレント・ティーチャーズ (平成25年度)

高等教育推進機構では平成24年度から、全学教育科目に係る授業アンケート結果において、総合評点の値が上位となった専任教員のうちから次項選定基準に基づき、「全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ」として選定し、所属・職名・氏名・担当授業科目・総合評点をホームページで公表することとしている。

また、エクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容・実効上の取組・工夫等について報告を得て紹介する。

教員から報告された授業への取組・工夫等については、学生へのフィードバックを目的として、また、教員のFDや教員相互の授業参照資料として公表する。

なお、平成23年度まで評価室が実施してきた授業アンケート結果の公表に至る検討の経緯や公表方法に関する考え方等は、平成15年度年次報告書（第1部第2章『学生による「授業アンケート」について』）や同別冊「学生による授業アンケート結果」(PDF)を参照願いたい。

なお、授業アンケートは学生の視点からの評価であり、この指標のみが授業の質や教員の教育能力を示すものではないことを付言しておきたい。

## 全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーの選定基準

### 1. 対象者

対象年度に開講した全学教育科目において、学生による授業アンケートを実施した授業科目を担当する本学の教員（非常勤講師を除く）とする。

ただし、アンケート提出者が9名以下の授業科目を担当する者は除く。

### 2. 選定方法

学生による授業アンケート結果において、文系・理系区分及び授業科目区分ごとに総合評価の値が上位の者から、原則、別表①の選出数に基づき全学教育科目におけるエクセレント・ティーチャーズとして選定する。ただし、総合評点（主要設問の評定値の平均）の値が4.00未満の者は除く。

なお、文系・理系区分は、担当教員の所属部局により別表②の「文系・理系区分」に基づき区分することとし、授業科目区分は、国立大学法人北海道大学全学教育科目規程（平成7年4月1日海大達第2号）第2条に規定する科目により区分することとする。

#### 【別表①：選出数】

		一般教育演習	総合科目	主題別科目	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目
文系	15	2	1	4	1	4	2		1
理系	15	4	1	1	1		2		6

#### 【別表②：文系・理系区分】

〈文系部局〉

文学研究科・文学部	公共政策学連携研究部	観光学高等研究センター
教育学研究院・教育学部	スラブ研究センター	外国語教育センター
法学研究科・法学部	国際本部留学生センター	アイヌ・先住民研究センター
経済学研究科・経済学部	高等教育推進機構	社会科学実験研究センター
メディア・コミュニケーション研究院	大学文書館	情報法政策学研究センター

〈理系部局〉

理学研究院・理学部	先端生命科学研究院	北方生物圏フィールド科学センター
医学研究科・医学部	保健科学研究院	創成研究機構
歯学研究科・歯学部	低温科学研究所	人獣共通感染症リサーチセンター
薬学研究科・薬学部	電子科学研究所	環境ナノ・バイオ工学研究センター
工学研究院・工学部	遺伝子病制御研究所	数学連携研究センター
農学研究科・農学部	触媒化学研究センター	サステイナビリティ学教育研究センター
獣医学研究科・獣医学部	情報基盤センター	トポロジー理工学教育研究センター
水産科学研究院・水産学部	アイソトープ総合センター	保健センター
情報科学研究科	総合博物館	環境健康科学研究教育センター
地球環境科学研究院	量子集積エレクトロニクス研究センター	

### 3. その他

- (1) 上記2のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容、実行上の取組・工夫等についての報告を得て紹介する。ただし、過去3年間に紹介したエクセレント・ティーチャー※は除く。
- (2) 一人の教員が複数の授業科目区分で最上位となった場合は、全ての授業科目について報告を得て紹介する。ただし、対象者の希望により、報告・紹介する授業科目をいずれか一つのみとすることができる。
- (3) 上記(1)、(2)のただし書きに該当する場合、及び退職等で報告を得られない場合は、次点のエクセレント・ティーチャーから報告を得て紹介する。

※評価室において選定したエクセレント・ティーチャーを含む。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ(平成25年度)

区分 内 順位	文系 理系	授業科目区分	総合 評点	部局名	職名	氏名	授業 形態	必修 選択	授業科目名	講義題目名	提出 枚数
*1	理系	一般教育演習	4.94	遺伝子病制御研究所	教授	高岡 晃教	演習	選択	フレッシュマンセミナー	ミクロの世界を探る人体のしくみと病気	21
2	理系	一般教育演習	4.85	遺伝子病制御研究所	教授	清野 研一郎	演習	必修	フレッシュマンセミナー	最先端の生命科学にふれよう	20
3	文系	一般教育演習	4.83	国際本部留学生センター	准教授	鄭 惠先	演習	必修	フレッシュマンセミナー	日本語のバリエーション	10
3	文系	一般教育演習	4.83	国際本部留学生センター	准教授	中村 重穂	演習	選択	フレッシュマンセミナー	日本語文章表現実践-「論文指導」以前-	21
5	理系	一般教育演習	4.82	歯学研究科	准教授	高橋 茂	演習	選択	フレッシュマンセミナー	唾液のサイエンス～知られざるその能力～	19
6	理系	一般教育演習	4.78	薬学研究院	准教授	尾瀬 農之	演習	選択	フレッシュマンセミナー	タンパク質の美しい形と意味	22
1	文系	総合科目	4.56	国際本部留学生センター	准教授	小河原 義朗 (他7名)	講義	選択	人間と文化	外国人に日本語を教える	37
2	理系	総合科目	4.43	先端生命科学研究院	教授	門出 健次 (他13名)	講義	選択	環境と人間	生体機能高分子が拓く先端生命科学 I	39
1	文系	主題別科目	4.68	メディア・コミュニケーション研究院	教授	藤野 彰	講義	選択	社会の認識	現代中国入門	21
2	文系	主題別科目	4.66	文学研究科	准教授	小田 博志	講義	選択	社会の認識	自然と文化のあいだー人類学からのアプローチ	62
3	文系	主題別科目	4.63	文学研究科	教授	北村 清彦	講義	選択	芸術と文学	美術館という現場	16
4	文系	主題別科目	4.62	文学研究科	准教授	鈴木 幸人	講義	選択	芸術と文学	日本の古美術と芸能	26
5	理系	主題別科目	4.2	理学研究院	教授	山口 淳二 (他13名)	講義	選択	科学・技術の世界	現代生物学への誘い II	46
1	理系	共通科目	4.38	情報科学研究科	准教授	村井 哲也	講義	選択	情報学 II		15
1	文系	外国語科目	4.75	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	ゲーマン ジェフリー ジョセフ	講義	必修	英語 I		28
*1	文系	外国語科目	4.75	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	ピアーズ ウィリアムソン	講義	必修	英語 III	中級:スピーキング	18
*3	文系	外国語科目	4.7	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	青山 和佳	講義	必修	英語 I		30
4	文系	外国語科目	4.66	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	ピアーズ ウィリアムソン	講義	必修	英語 I		33
*1	理系	外国語演習	4.84	医学研究科	講師	高野 廣子	演習	選択	英語演習	中級: 病気に関係する英語	18
2	文系	外国語演習	4.76	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	カイリ マーティン	演習	選択	英語演習	中級: Communicating Across Cultures	14
3	文系	外国語演習	4.74	メディア・コミュニケーション研究院	准教授	ピアーズ ウィリアムソン	演習	選択	英語演習	中級: An Introduction to Political Studies	21
4	理系	外国語演習	4.56	医学研究科	講師	高野 廣子	演習	選択	英語演習	中級: 病気に関係する英語	14
*1	理系	基礎科目	4.67	理学研究院	助教	エリザベス タスカー	講義	必修	物理学 II		13
1	理系	基礎科目	4.67	先端生命科学研究院	助教	中島 祐	講義	必修	化学 I		59
*3	理系	基礎科目	4.65	理学研究院	助教	エリザベス タスカー	講義	必修	物理学 I		13
4	理系	基礎科目	4.56	理学研究院	准教授	大宮 寛久	講義	必修	化学 II		16
4	理系	基礎科目	4.56	理学研究院	教授	寺尾 宏明	講義	必修	線形代数学 I		49
6	理系	基礎科目	4.43	地球環境科学研究院	教授	大原 雅	講義	必修	生物学 II		54
*1	文系	日本語科目	4.65	国際本部留学生センター	准教授	高橋 彩 (他2名)	講義	選択	日本事情		11

：今年度の「授業内容・工夫等」執筆依頼者

\*は過去3年の執筆者のため除く

◎授業科目区分毎の授業アンケート実施者数(延べ)

一般教育演習	89名
総合科目	48名
主題別科目	97名
共通科目	28名
外国語科目	118名
外国語演習	100名
基礎科目	175名
日本語科目及び日本事情に関する科目	4名
計	659名

# 一般教育演習(フレッシュマンセミナー)

## 「最先端の生命科学にふれよう」

遺伝子病制御研究所 教授 清野 研一郎

### ■ シラバス

#### 授業の目標 Course Objectives

21世紀は生命科学(Life Science)の時代と言われる。それは、多くの国々で高齢化や疾病の構造変化が起きる中、健康的で豊かな暮らしを望む声が高まっていることと関係している。一方、生命科学は、環境問題やエネルギー問題、あるいは食糧問題や人口問題を理解し解決するためにも極めて重要な知識であり学問である。本セミナーではそのような観点から、理系・文系を問わず学習意欲の高いフレッシュマンを受け入れ、ミクロからマクロ、物質からシステム、そして基礎から応用に至る最新の生命科学研究の実際に触れ、最先端の研究がどのように行われているのか俯瞰することを目的とする。具体的には、分子生物学、細胞生物学、腫瘍生物学、神経科学、神経薬理学、肝臓外科学、臓器移植/再生医学等のトピックスを取り上げ、北海道大学で最先端の研究を行っている気鋭の講師陣が担当する。また、これらの講師によるインタラクティブな講義に加え、自主学習・発表・討論といったサイクルで授業ならびに演習を行うことで、大学生らしい能動的な学習習慣を身につけることを目標とする。

#### 到達目標 Course Goals

分子生物学、細胞生物学、腫瘍細胞学、神経科学、神経薬理学、肝臓外科学、臓器移植/再生医学の最先端研究に触れ、その内容と解析手法、原理と応用などについて説明できる。

生命科学研究の現状について理解し、現在の問題点と今後の展望について自分の言葉で表現することが出来る。

#### 授業計画 Course Schedule

オリエンテーションの後は、各トピックスについて2週間(2コマ)ずつ用いて授業を行う。第1週目に各分野の専門家が基礎的な講義を行い、そこで課題を与える。発表担当学生は第2週目までに課題について自習・調査し、発表を行う。担当以外の学生もできる範囲で自習して参加し、討論を行う。講義ならびに討論は座学だけではなく、研究室訪問、研究機器・動物の見学、実習なども含む予定である。

以下は講義予定のテーマと担当教員(順序は変更になる可能性がある)

- 1、オリエンテーション、文献検索法について 清野研一郎(遺伝子病制御研究所)
- 2、細胞の基本、分子生物学の最先端 清野研一郎(遺伝子病制御研究所)
- 3、細胞の基本、分子生物学の最先端 ディスカッション
- 4、細胞生物学の最先端 芳賀永(先端生命科学研究院)
- 5、細胞生物学の最先端 ディスカッション
- 6、がん研究の最先端 藤田恭之(遺伝子病制御研究所)
- 7、がん研究の最先端 ディスカッション
- 8、神経科学の最先端 鈴木利治(薬学研究科)
- 9、神経科学の最先端 ディスカッション
- 10、肝臓外科学の最先端 武富紹信(医学研究科)
- 11、肝臓外科学の最先端 ディスカッション
- 12、神経薬理学の最先端 吉岡充弘(医学研究科)
- 13、神経薬理学の最先端 ディスカッション
- 14、臓器移植/再生医学の最先端 清野研一郎(遺伝子病制御研究所)
- 15、臓器移植/再生医学の最先端 ディスカッション
- 16、まとめ

#### 成績評価の基準と方法 Grading System

出席2/3以上の者を評価対象とする。

学期末に「生命科学研究」に関する小論文を課す。

日本語の文章によるものでももちろん可であるが、英語、もしくは音楽、絵画、ダンスなどでの表現も歓迎する。

その内容と授業中の発表、討論内容及び学習姿勢をもとに評価する。

## ■授業の取組・工夫等について

### ①授業の目的・内容

大学から指示されたフレッシュマンセミナーのねらい「自ら主体的に学ぶという大学にふさわしい学習態度への転換」「それぞれの関心、個性に応じた問題解決能力の育成」「思考力、読解力、文章・口頭での表現力などの「知的基礎体力」の育成」と、フレッシュマンセミナーの役割「教科区分に拘束されない共通のテーマについて教員のもと学修し、討議する機会を持つ」「教員の学問への姿勢に触れ、教員と学生、学生相互の人的な触れ合いを通じて新入生が大学という新しい環境への早期適応を図る」をふまえ、自分の専門である生命科学の授業においてどのようにしたらこれらに沿うように出来るか考えた。その結果、北海道大学で最先端研究を行っている研究者の講義と、学生自身による自主学習・発表・討論の繰り返しによる授業スタイルに行き着いた。演習形式のセミナーにより、大学生らしい能動的な学習習慣を身につけることを目的とした。

### ②実施上の取り組み、工夫

講師による講義と学生による発表を1週おきに行い、2週間で1トピック（分子生物学、がん研究、神経科学、臨床医学など）を扱っている。2週目に発表する学生の発表資料のチェックを、TAの協力も得て毎回行っている。座学だけでなく、出来るだけ実際の物に触れると言う目的で、研究室や病院の見学など、学生が「外に出て」「実際に見たり触れ」られるようにしている。学期末に生命科学に関する小論文を課しているが、日本語による文章表現だけでなく、最も得意な表現方法（ダンス、音楽など）があればそれでもよいことにしている。

### ③その他参考事項

高等教育機構で待っていれば講師がやって来てくれるという、講義を受けるのに受け身の姿勢ではいけないと言う考えから、毎週学内の様々な場所（講師の所属部局など）に連れ出している。最初の授業では、本セミナーに向いている学生として、やる気のある人、明るい人、などの他に「授業に貢献できる人」と言っている。

## ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・実際の最先端の研究に触れることができた。
- ・生徒が積極的に発言できる。雰囲気がとてもアットホームで毎回授業が楽しみだった。
- ・いろいろな学部の話の先生の話の話を聞いた点。他の授業では行けないような大学の研究室や大学病院の手術室に行っている見学できたこと。
- ・講義だけでなく、研究室に見学に行けたのが良かったです。普段はなかなか研究室にお邪魔する機会がないので、とても貴重な時間でした。講義内容も論文発表前のまさに最先端のものでした。プレゼンテーションを作る時も十分にサポートして頂けて有難かったです。
- ・文系の自分にとって理系の内容は難しいものであったが、自分が知らなかった、知ろうとしなかった分野を学習できて、視野が広がって良かった。
- ・様々な先生が様々な分野での最先端のお話を下さり刺激になりました。座学だけでなく、研究室や病院に行き現場の様子も見れて良い経験になりました。
- ・オムニバスの授業で、色々な分野の最先端の生命科学に触れることができた。授業の内容はもちろん興味深かったが、それ以外の研究室の見学や、手術の見学など普段では、見る事ができないものを見れて楽しかったし、自分の考える材料になったと思う。
- ・毎回、色々な先生に違った観点からの医療についての講義を聞くことができて、とても有意義でした。
- ・研究所に入れてもらえたり、本当に最先端の講義をやってくれたのがとてもよかった。授業に対する生徒たちの雰囲気もすごくよかった。積極的に意見を言うことができた。
- ・最先端研究にふれることができ、研究室に訪問できてよかった。はじめてプレゼンテーションをして、たくさんの講義をきくことができたのは自分にとってプラスになったのでよかった。
- ・一番最初の授業を思いました。4月のころはまだ雪が残っていて、講義の抽選のために神社にお参りしたのが懐かしいです。3ヶ月の間にたくさんのお話を聞いたこと、また、多くの経験ができました。大学の中では、自分の知らないところでたくさんの方が行われているということを考えるようになりました。ありがとうございました。

## 総合科目

### 「人間と文化 外国人に日本語を教える」

国際本部留学生センター 准教授 小河原 義朗

#### ■ シラバス

##### 授業の目標 Course Objectives

日本語教育の諸領域を「内容」と「実践」という二つの角度から取り上げ概観する。

##### 到達目標 Course Goals

- 1) 日本語教育について他人から聞かれたときに簡単に答えられるようになる。
- 2) 日本語が実際に教えられている現場についてその一端を知る。
- 3) 日本語を母語としない人から見た日本語の構造、運用、学習のあり方がわかるようになる。

##### 授業計画 Course Schedule

- 第1回：ガイダンス、抽選、イントロ（小河原義朗）
- 第2回：日本語の語彙・意味1－語彙を中心に（中村重徳）
- 第3回：日本語の語彙・意味2－意味を中心に（中村重徳）
- 第4回：日本語の音声（山下好孝）
- 第5回：日本語の文法（山下好孝）
- 第6回：四技能を教える①（小林由子）
- 第7回：四技能を教える②（小林由子）
- 第8回：日本語教師という仕事①（山田智久）
- 第9回：日本語教師という仕事②（山田智久）
- 第10回：授業分析（小河原義朗）
- 第11回：学習者の誤用と「中間言語」（鄭恵先）
- 第12回：異文化間のコミュニケーション・スタイル（鄭恵先）
- 第13回：ことば・文化を学ぶ人々1（青木麻衣子）
- 第14回：ことば・文化を学ぶ人々2（高橋彩）
- 第15回：全体のまとめ（小河原義朗）

##### 成績評価の基準と方法 Grading System

- ・ 12回以上出席した者を評価の対象とする。
- ・ 各担当者が授業中に提示したテーマの中から一つを選択して、2,000字以上のレポートを作成する。

#### ■ 授業の取組・工夫等について

本授業は、北海道大学に留学している留学生を対象に日本語を教えたり、日本語学習を支援したりする日本語教育科目や、日本人学生と留学生が1つのクラスでともに学び合う多文化交流科目等を提供している国際本部留学生センターの教員が毎年開講している授業である。本年度は私が責任者となり、全8名で行った。

##### ① 授業の目的・内容

近年、国内外を問わず身近に日本語を学び、話す外国の人々が増え、国内でも外国人と日本人がともに生活し生きていく社会へと変化してきている。そのような現状を踏まえ、「外国人に日本語を教える」とはどういうことなのか、その基本的な理解を目指すと同時に、これから自らが「外国人に日本語を教える」ことに関わっていくための視点や情報を提供することが目的である。そのため、「外国人に日本語を教える」ためにはまず「何を」「どのように」教えるのか、日本語教育の諸領域を「内容」と「実践」という二つの角度から取り上げ概観する。その上で、留学生センターで我々教員が留学生に実際に日本語を教えている授業を見学することによって、「内容」と「実践」を結びつける。そして、日本語を教える教師の役割と必要とされる資質・能力、日本語学習者が話す日本語の特徴とそのメカニズム、さらにはことばと文化の視点から総合的に「外国人に日本語を教える」ことに迫っていく。

## ②授業実施上の取り組み・工夫

ことばを学ぶときに、一方的に教師が講義をするだけでは効果的とは言えない。その点、普段、留学生センターで日常的に留学生と接し、日本語を教えている教員が担当していることから、各教員が各担当の知見を効果的に伝えるために、グループワークやペアワークを通して受講生自身が考え、あるいは実体験しながら学ぶ方法が多く取り入れられ、教員が学生に質問しながらインタラクティブに授業を進めることが当然のように行われる。留学生も比較的多く参加しており、本授業に参加すること自体が異文化を実体験する機会ともなっている。評価は、各担当教員より提示された課題から一つを選んでレポートを書くことになっており、多様な課題から、学生自身が興味のあるものを選ぶことができる。以下、担当した教員数名からの授業における工夫に関するコメントである。

中村重穂：「日本語の語彙・意味」を2回担当し、1回目を語彙論、2回目を意味論に充てた。全体の中で第2、3回目の授業なので、まずは特に日本人学生に日頃使っている日本語を振り返ってもらおう契機となるような話題を提供し、活動してもらった。

山下好孝：この講座で学んだことを実践して貰うつもりで講義に臨んだ。本年度より国際交流基金が「日本語パートナーズ」という事業を展開している。講義に参加した諸君がこのプログラムなどを通じて、海外で日本語教育を実践することを希望する。

小林由子：「四技能を教える」では、「話す」「書く」技能を養うための学習項目と方法について、受講者自身の技能の向上も図れるような振り返りを意図した。そのために、日本語学習者のインタビューと文章、および教材の分析をグループで行った。

山田 智久：「日本語教師とは」というタイトルで、教師のキャリアパスと教師の成長について概説した。特に、現職の日本語教師がどのような準備をして授業へと臨んでいるかについての説明に時間を割き、日本語教師像をつかんでもらうようにした。

鄭 恵先：他の授業で実践とインタラクションを重視した内容が多いので、本授業では言語教育の土台となる理論について概説した。その際に、事例や意識調査の結果など、関連するデータを多く提示することで、それらの現象をより身近なものとして意識できるように工夫した。

青木麻衣子：第13回目「ことば・文化を学ぶ人々1」を担当した。世界にはどのぐらいの日本語学習者がいるのか、日本語教育が盛んなオーストラリアではどのような政策の下でそれが推進されてきたのかを題材に、言語の「力関係」を、受講者とともに考えた。

小河原義朗：授業を改善するために授業の何をどのように観ればいいのかについて議論した上で、留学生センターの授業見学に臨んだ。見学して感じたことをもとに、日本語を教えるために必要なものは何か、グループで日本語教育のコース・デザインを試みた。

## ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・たくさんの先生から日本語教育についておもしろい授業をたくさん受けられた。グループワークも多く、友達も出来、留学生との交流も刺激的だった。
- ・留学生と接することができた。・学生が全体的に授業に参加していた。・実際に国際本部の授業を見学に行けた。
- ・さまざまな先生の授業が受けられ、視野が広がった点留学生と交流ができた点。
- ・オムニバス形式で先生によって、このテーマをとらえる観点が様々だったのでとてもおもしろかった。
- ・様々な意見と触れる事が出来、とても刺激的だった。授業の内容としてもとても面白いものだった。
- ・多くの先生が様々な観点から「日本語を教える」ということについて勉強できてよかった。
- ・毎回担当教員が違うので、それぞれやってくれる内容も個人的な特徴を生かしたものでしたので、良かったです。
- ・グループで日本人学生さんと留学生をディスカッションさせて、とても効果があると思います。・毎週一つのテーマについて教えていただいて、いろいろ勉強になりました。

- ・留学生とする私たちは日本人学生と一緒に勉強するのは嬉しい。普通の授業は国際本部でほかの留学生と一緒に参加するので、この授業は日本人学生と交流できて、勉強になった。
- ・担当教員がほぼ毎回変わるオムニバス形式の講義であったので、色々な分野の方のお話を聞くことができて、とても良かった。
- ・グループワークがたくさんやりましたこと。
- ・留学生と日本人学生の割合がほぼ同じという環境がすごくよかったです。留学生が熱心に日本語を学んでいる姿をみて、私も大変刺激を受けました。また、何げなく話していた母語の日本語の深さを少し知ることができました。
- ・実例がたくさんあって、日本語先生という仕事、日本語教育の現状などをよく知りました。
- ・どの先生もグループワークさせるものが多くて楽しみながら学べた。
- ・グループに分かれてディスカッションをするところ。・留学生と交流できるところ。
- ・前考えたことのない日本語教師になるのに必要な情報などを勉強した。
- ・いろいろな先生から教えてもらった。・日本人の学生と一緒にの授業。
- ・評価が2000字以上のレポートのみで、課題もなく楽だったこと。「日本語教師」に必要なことを重点的に授業が展開された。
- ・色々な先生の話が聞ける。
- ・日本人学生と交流できる。
- ・留学生とたくさん話せた点。
- ・毎回様々なテーマから日本語教育を勉強できたので、その中から特に自分が興味を持てるものを見つけられて良かった。また、留学生が多く、ディスカッションを通して色々な国の人と意見交換できたことが良かった。
- ・留学生とのグループでディスカッションできたこと。日本語教師になるためにどんな具体的方法があるかわかった。
- ・先生方の精華をいただいてすごく勉強になった。
- ・いろいろな先生が違う観点から教えていただいて、大変勉強になったと思います。
- ・様々な外国語教育が学べた。日本語だけではないと思います。
- ・全体。
- ・生徒の意見が積極的に出せるような授業がよかった。
- ・多くの文化に触れられたこと。周りの学生の向上心が高いこと。
- ・色々な先生が個性的でおもしろい授業をしてくれるので良かった。グループ活動が多かったので、他の人と交流しながら受けられるのが良かった。
- ・グループワーク。色々な留学生や先生との出会い。
- ・実際に日本語を学んでいる留学生が多くいたことの利点は大きかったと思う。
- ・毎回担当講師が変わるので、様々な視点から「日本語講師」を見ることができた。

## 主題別科目

### 「社会の認識 現代中国入門」

メディア・コミュニケーション研究院 教授 藤野 彰

#### ■ シラバス

##### 授業の目標 Course Objectives

中国が世界第2位の経済大国となり、政治力、軍事力も増している今日、その一挙手一投足が世界情勢に大きな影響を及ぼすようになってきている。中国について考えることは、すなわち今後の世界やアジアの行方を考えることであり、日本がいかに生存し、発展していくかを考えることにもつながっている。こうした大局的な認識に立って、現代中国の政治、経済、外交、軍事、社会、文化などに対する理解を深めることを主眼とする。

##### 到達目標 Course Goals

単なるイメージや想像、偏見で中国をとらえるのではなく、事実に基づいて中国の「等身大の実像」を知ることが第一の到達目標である。さらに、基礎的な知識を踏まえて中国の多面的な現状に対する関心の幅を広げ、自分の頭で中国問題を考える力を身につけることが第二の到達目標である。とりわけ、日中間に尖閣諸島問題、歴史問題をはじめとした様々な摩擦が存在する中、「いかに中国と付き合っていくのか」をめぐる問題意識を深める。中国語履修者のもとより、中国問題に関心を寄せる幅広い学生の受講を期待する。

##### 授業計画 Course Schedule

一口に現代中国といっても、その対象となる分野は多岐にわたる。まず基本的な分野として中国という社会主義国家の政治社会構造、内政が抱える諸問題、対外関係などに関する基礎理解を深めたい。具体的なテーマとしては、中国共産党はなぜ崩壊しないのか、中国ではなぜ環境破壊が深刻なのか、尖閣問題の背景には何があるのか、少数民族はなぜ抵抗を続けるのか——などの疑問を設定し、原因や課題を考察していきたい。毎回の授業で、必要な資料やプリントを配布する。

##### 成績評価の基準と方法 Grading System

出席状況や授業への取り組み、レポートによって総合的に判断する。

#### ■ 授業の取組・工夫等について

##### (1) 授業の目的・内容

私は2012年4月の北大赴任以来、学部生対象の授業で「中国語Ⅰ、Ⅱ」や「中国語演習」を担当しています。言うまでもないことですが、一つの外国語を学ぶということは、一つの未知の世界に知的好奇心をもって分け入っていくということであり、単に発音や文法を学ぶだけでなく、その言葉が話されている国や地域の歴史、文化、政治、外交、経済などについても関心を持ち、理解を深めることが望まれます。せっかく中国語を学ぶのであれば、中国という「くに」のありようにも目を向けてもらいたい——この科目はそんな思いを込めて開講しました。もちろん、中国語は選択していないが、中国についてもっと知りたい、という学生も大歓迎です。今回は24名の学生が履修登録してくれました。

授業では、中国の人口問題、一人っ子政策といった基本状況から、毛沢東評価、チベット、アフリカ進出など様々なテーマを取り上げましたが、私がしばしば強調したのは、「中国をいかに観察し、理解するか」という地域研究の視点です。特に、重点的に訴えたのは、「中国は一つの国であると同時に、一つの世界である」「日本人の常識を基準として中国を見てはいけない」「縦軸（歴史）と横軸（空間）で中国を複眼的にとらえる」「メディアや他人の判断に引きずられず、事実に基づき、自分の目で現象を判断する」といったスタンスの重要性です。日中関係が悪化するなか、勝手な思い込みや断片的な知識で「中国はこうだ」と決めつけてしまう風潮が広がっています。決めつける前に、まずは事実をよく知り、自分の頭で問題を考える。そんな習慣を身につけてもらうことに主眼を置きました。

## (2) 授業実施上の取組・工夫

開講に当たっては、最初にアンケートを実施し、学生が中国に対してどんなイメージを抱いているのか、どういう問題に関心があるのかなどを把握しました。それを踏まえ、学生たちにできる限りナマの中国の動向に関心を持ってもらうため、毎回、新聞各紙の中国関連記事の中から興味深い内容のものを選び、補助教材としました。それぞれの記事で取り上げられた問題の意味や背景、関連情報を具体的に解説し、日々の「中国ニュース」を通じた中国理解の促進にも力点を置きました。私は北大に赴任する前、34年間、新聞記者として働き、このうち通算11年間にわたって中国特派員を務めた経験がありますので、現場での取材体験なども折に触れて紹介し、本や一般情報ではなかなか知りえない等身大の中国の姿を極力伝えるようにしました。

私自身の講義と並行して授業の柱としたのは、学生全員によるミニ発表です。ある程度、授業が進んだ段階で、学生一人ひとりにテーマを自由に設定してもらい、授業1回当たり2～3人のペースで発表、討論を行いました。発表のテーマは、インターネット検閲と規制、人民元レート、香港の民主化、社会保障制度、一人っ子政策と高齢化、コピー文化、貧富格差、出稼ぎ農民、尖閣問題、中朝関係など多岐にわたり、学生たちの関心の幅の広がりがうかがえました。発表方法としてはパワーポイントを活用する学生が多く、プレゼンテーションの初歩的な訓練にもなったと思います。学生による発表は時間の配分（時々、授業時間を超過）などの問題もありましたが、学習意欲増進、授業の活性化といった面ではやはり効果があると実感しました。また、発表時のテーマについては、さらに勉強を深めて期末レポートのテーマにつなげるよう指導し、実際、学生の多くは自分の発表を発展させる形でレポートをまとめました。なお、授業中は、「疑問があったら、どんどん聞いて。どんな質問にも答える」と何度も呼びかけ、学生に積極的な発言を促すようにしました。

## (3) その他

今回、意外だったのは履修学生の4分の1ほどが中国人学生だったことです。「自分の国の状況は本当のところどうなっているのか」「日本人は中国をどう見ているのか」といった好奇心からのようです。日中双方の学生が混在したことで、図らずも教室の中でお互いの認識の交流と刺激が生まれました。こうした「国際的な場」を、授業展開の過程でもっと効果的に生かしていく工夫が課題として残ったと感じています。

### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・中国という国について、知らなかったことを取り上げてくれたこと。教員の経験が豊富であること。中国人留學生がたくさんいたこと。
- ・留學生と一緒に日中間の課題を考えることで双方に良い刺激になって良いと思う。
- ・中国についての様々な問題について触れることができ、面白かった。生徒の発言から授業を広げていて、良かった。
- ・中国で働いていた経験のある教員が指導してくださったので、リアルな体験談を聞くことができよかった。質問に対しても、詳しく、わかりやすい解説を毎回して下さるのがよかった。
- ・先生がとてもやさしい、授業時間外の質問も丁寧に対応してくれる。
- ・先生は親切で、熱意を伝えてくれました。授業も充実で、大変勉強になりました。先生は学生の知的好奇心を起し、学生に自主的学習をさせて、効果は非常によかった。先生は知識を大量に持っている方であるので、感心しました。
- ・元ジャーナリストという経験を生かし、現代中国社会の実態や問題点を詳しくかつ分かりやすく教えてくれました。また、中国社会を多方面の視点で分析したのが大変興味深かったです。
- ・中国人のプレゼンが聞けて中国についての理解が深まった。
- ・学生側も参加して、中国の実情について議論できて良かった。
- ・先生が何でも答えてくれる点。
- ・藤野先生の深く、新しい中国の見方に触れることができ、より中国に対する理解が深まった。最終レポートを書く中で、日中関係について、より考えが整理された。
- ・客観的な視点から中国に関する諸問題を分析・説明した。非常にいいと思われる。
- ・自分が考えたテーマはクラスで発表し、皆で討論するところがよかったです。日本の方に中国の事を教えることはすこしですが日中友好を促すことになると思います。
- ・中国人留學生が多く、中国の実情を知ることができた。

## 共通科目

### 「情報学Ⅱ」

情報科学研究科 准教授 村井 哲也

#### ■ シラバス

##### 授業の目標 Course Objectives

情報学Ⅰの内容を発展的に扱い、情報社会への参画と情報科学の理解のためにさらに必要な知識を講義する。

##### 到達目標 Course Goals

情報社会における法・倫理・安全性等を理解できる。

情報科学の基礎となるハードウェア・ソフトウェアおよびネットワークのしくみを原理的に理解できる。

##### 授業計画 Course Schedule

以下の学習内容に関して、電子スライドやビデオを利用した講義形式に加えて、コンピュータを使ったデータ処理やグループ学習等の実習あるいはeラーニングでの学習を行うこともある。

1. 情報社会における法と倫理
2. 情報社会とセキュリティ
3. いろいろな情報のデジタル表現
4. コンピュータの構成としくみ
5. アルゴリズムとプログラミングの基礎知識
6. コンピュータネットワークのしくみ
7. コンピュータの将来と限界

##### 成績評価の基準と方法 Grading System

評価は絶対評価とする。

授業への参加（出席、講義への取り組み、課題提出等）及び達成度評価（レポート、試験等）により

- (1) 情報科学の基礎知識に関して正確な理解が得られたかどうか
- (2) 現代社会における情報技術の役割や発展性を把握できたかどうか
- (3) 情報社会に参画するための基礎知識や問題意識を深められたかどうか

に関して、総合的に以下の5段階で評価する。

秀（90点以上）、優（80～89点）、良（70～79点）、可（60～69点）、不可（0～59点）

#### ■ 授業の取組・工夫等について

##### ① 授業の目的・内容

1年後期に開講される「情報学Ⅱ」は、情報リテラシー教育を中心とする前期の「情報学Ⅰ」を受けて、その内容を発展的に扱い、情報社会への参画と情報科学の理解のためにさらに必要な知識を講義することが目的となっています。したがって、情報やコンピュータに関する「科学」やインターネットの「技術」など理工系の基本事項に加えて、情報社会の発展の歴史や構造、その安全性・危険性をも含めた文系の内容も対象としなければなりません。両者のバランスをとりかたが非常に難しい科目であると思います。

##### ② 授業実施上の取組・工夫

「情報学Ⅱ」は共通科目ですからシラバスに提示されている内容を基本的に授業を計画・実施しています。授業の形式はシラバスにあるとおり、パワーポイントによるプレゼンテーション（+スライド資料コピー配布）とビデオ視聴が基本で、特に目新しいことはしていません。私自身は理工系出身ですから、情報に関わる文系の内容をどう学生に皆さんに伝えるか、に関しては苦勞を感じます。コトバやせいぜい画像程度で説明しても学生の皆さんには中々伝わりません。そこで著作権の問題をクリアできるビデオを利用しています。ビデオによっては私見では多少の偏向や不十分性を感じるものもあるので、学生の皆さんに見ていただく以上、膨大な書籍・文献やネット上の信頼できるデータなどに当たって、できるだけ確認（ウラ）を取り、また、その重要性を授業時に注意喚起しています。

授業で視聴するビデオの中では、例えば、25年ほど前に放送されたコンピュータの歴史があり、戦争とコンピュータとの因果を初めて知った、と驚く学生の皆さんは結構多いです。また、日本でu-Japan政策が推進された10年ほど前のビデオでは、その頃からスマホの原型があったのか、とびっくりする人がいる一方で、生き残らなかった技術も多く、多彩な意見を寄せてくれます。他に、ロボットやサイボーグ技術に関するビデオも反響が大きいです。なお、ネットの危険性に関して情報基盤センターが優れた教材を提供していただき大変助かっています。

いま、学生の皆さんの意見・反応について言及しました。授業の内容が比較的盛りだくさんになるので、グループ学習や討論などの時間が取りにくいいため、感想や質問を書く用紙を毎回、配布し、可能な限り次回以降の授業で回答しています。興味を持って授業に望んでくれる学生さんは授業時間内でよくぞここまで、というくらいの力作を提出してくれて、嬉しい悲鳴を上げています。しかし、むしろIT社会の進展とともにリアルタイムで成長してきた学生の皆さんの感想や意見から私自身が学ぶことのほうが多いと感じます。自由意見欄で「人間が新技術を初めは拒みながらも次第に慣れていってしまうという教訓」と書いた学生さんがいますが、あらためてハッとしてしまいます。そのような学びを次年度の授業に反映できることは大変な喜びです。履修生の皆さんやこの授業を担当させていただいていることに深く感謝しております。

### ③ その他

私見ですが、世の中の一部の方ですが、「情報」に関する学問に対して誤解があるように思えるときがあります。要するに、単に表面的に携帯やスマホの技術だと。しかし、情報の科学は情報理論や記号論理学、計算論など高度な研究分野から出発し、現代の社会を見えないところで支え、大きな影響力を持つ壮大な学際領域です。それを知った上でこのIT社会を生きるか、知らずに生き(て流され)るか、では天と地ほどの差があると思います。半期の授業では残念ながら十分に伝えきれない点も多々ありますが、この授業がもはや避けて生きることができないIT社会を安全かつ積極的・生産的に生きるための、ささやかながら一つのきっかけとなれるように、努力しているつもりです。

### ■学生の自由意見(良かったと思う点)

- ・学生の質問にしっかりと答えてくれていた点。・興味が沸くような番組などを視聴できたこと。
- ・様々な種類のビデオを授業時間中に見るという形式。色々考えるよいきっかけになった。
- ・なかなかふれることのない分野にふれられ、いろんなことを説明していただいたので興味の幅が広がりました。
- ・ビデオがみれたこと。
- ・スライドの内容やビデオの内容が興味深くて分かりやすかった。
- ・映像が多くて分かりやすかった。テスト前に、復習をしてもらい理解が深まった。
- ・一般生活ではなかなか知ることのできない、情報社会の危険、人間が新技術を初めは拒みながらも次第に慣れていってしまうという教訓をビデオを用いて、痛感できた。特にGoogleの事項は印象的だった。

## 外国語科目

### 「英語 I」

メディア・コミュニケーション研究院 准教授 ゲーマン ジェフェリー ジョセフ

#### ■ シラバス

##### 授業の目標 Course Objectives

The purpose of this course is to provide students with basic practice in spoken and written English and in oral presentations so that they can better prepare themselves for more advanced level courses which they will be taking later on.

Particular focus will be placed on 1) English pronunciation, rhythm, and intonation, 2) writing paragraphs, 3) oral presentations.

##### 到達目標 Course Goals

- Improve English vocabulary and ability to use it in context.
- Improve English pronunciation and intonation abilities.
- Develop the ability to write a short structured paragraph in English.
- Develop and demonstrate the ability to give an oral presentation in English.

##### 授業計画 Course Schedule

This course will focus on developing 1) English pronunciation, rhythm and intonation, 2) the ability to write a short structured English essay, 3) the ability to give a presentation in English.

We will practice these skills throughout the semester basing our activities on the materials in the textbook and other sources, should need arise.

Week 1: Course Introduction

Weeks 2-12: Textbook (chapters 1-11)

Week 13: Giving a good oral presentation in English

Week 14: Oral presentations

Week 15: Oral presentations

##### 成績評価の基準と方法 Grading System

Participation (50%), Quizzes and Weekly Exercises (30%), Oral Presentation (20%)

Participation (50%)

All students should do their best to participate actively in English at all times. Students who participate positively in class will receive higher marks

Quizzes (20%)

Each class will begin with a short quiz to help review the material covered in the previous week. These will be counted toward the final grade.

Weekly Exercises (10%)

There will be short periodic exercise tasks based on the materials studied in class, also to be counted toward the final grade.

Oral Presentation (20%)

At the end of the course, students will be required to give an oral presentation, based on a topic of their choosing in consultation with the instructor, as well as to submit a written script. Following the oral presentation, students will be expected to explain as well as to respond to questions from their fellow students and the instructor.

A more detailed explanation of this task will be given by the instructor during class.

#### ■ 授業の取組・工夫等について

##### 目的

この授業で学生たちに評価されたことは喜びであり、光栄です。おそらく高く評価された理由の一つはこの授業が学生たちが高校を卒業してからの最初の英語授業にあるのでは

ないかと考えますが、それだけではないです。つまり、20代の時に10年近く日本で英会話の仕事に従事してきた私ですが、その時からの指針の一つは Grammar 中心の高校英語によって形成されがちな英語に対するハードなイメージを崩すことです。すなわち、学生たちがリラックス出来、ミスをあまり気にせず実際に他の学生や外国人である指導者の私とTA に対し、役に立つコミュニケーションを重視しています。たとえば、そのために、最初の二つの授業は授業時間の半分以上を教室を動き回り、ある項目リストに書かれている特徴（海外に行ったことがある人、珍しいスポーツができる人、三つ以上の方言や言語が話せる人）の人を英語で探させます。私やTAに親しめるために、黒板に書いてある三つの情報の中で間違っている情報を当てさせ、学生たちが気づいた私の変な癖等を学生たちが突っ込めるような機会、その時に使う英語表現を学ぶチャンスを与えたり、とにかく英語が固い言語である、外国人と話すには完璧な文法をしゃべれないとならないという殻を破るために、最初の授業から教室の雰囲気づくりに力を入れています。あるいは、学生たちに身近な話題（GW 中の予定、6月の大学祭等）について学生同志で話す機会や、なじみのある出来事について好きなことと嫌いなことを三つずつ書かせ、賛成と反対を表す英語表現を教えるからディスカッションをさせ、お互いの気になる話題について活発に議論ができるよう、兎に角学生中心で学生が参加したくなるような授業になるよう工夫しています。

学生たちとイキイキとしたコミュニケーションが取れるよう、なるべく最初の一か月の間に全員の名前や友達関係を覚え、二人か三人組みのペアーワークを課し、友達の可笑しなところを聞き出すことをネタにクラスの笑いを取ったり、あまり授業で発言をすることがない学生に学生の名前を使うことによりその人と私がつながっていることを示すなど、学生たち同志や私と学生たちとの間の関係性づくりに力を入れています。

毎週の授業はじめに、最近私に起きた変な出来事等の small talk に基づいて、あるいは授業中に自然発生的に起きた必要性から教えた役に立つ英語表現等についてのクイズを毎週課すことにより、反復による学習効果、前週に聞いたことを短い時間内に書くことにより文字で表す機会を与えるようにしています。この授業が高く評価された去年は、上海出身の中国人の博士課程のTAはとてもフレンドリーかつ真面目な人で、毎回のクイズで学生たちのよく起こす問題をまとめてくれたため、これらを毎週復習することができたことも評価されたようです。

このようにして、授業の一つの設定目標である paragraph writing の他に writing の機会を与えたことは総合的な英語力発達につながるようで、評価されたが、全体的にいうとたくさん書く、思い切ってしゃべることの成果は月末のオーラル・プレゼンテーションの時に発揮され、非常によく整理された、ユーモアとオリジナリティーに飛んだプレゼンのみならず、質疑応答における学生たちの活気あるやり取りややりあえに結実したようにも思えます。今後もこのようなアンケート結果を踏まえて授業改善に取り組みたいと思います。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・発言する機会が多かったため、双方向性のやりとりが実現できていた。内容も多岐に及び、あきずに学習できた。
- ・生徒が積極的に授業に参加でき、また英語を話す機会が多く、日常に生かせることができた。生徒に対する接し方もとても温かみがあり、リラックスして授業に取りくめた。
- ・実際のネイティブスピーカーと英語で会話することはとてもよい経験になった。教員も聞き取りやすいように話してくれた。
- ・高校ではないような「実際に話す」ことをたくさんできてよかったと思う。また、教員の先生も非常に親切で毎週の授業が楽しかった。
- ・生徒全体の英語のレベルに合わせた授業だった。
- ・積極的に英語を話す機会があったので、将来のためになると思った。
- ・speaking 中心の授業であった点。授業に合わせて定期的な小テストを実施した点。
- ・発表などによって、英語で話をするような機会が多く与えられ、有意義であった点。英語による説明は、どの生徒も十分に理解できるように配慮がされており、内容を捉え損なうことが無かった点。
- ・学生の活動に重点がおかれており、参加していて楽しかった。
- ・一方的に話を聞く授業ではなく自分から参加できる授業だったのでとても楽しくそれでいて英語を学ぶことができました。その点が良かったと思います。

- 最後のプレゼンの発表を聞くのが楽しかった。
- 先生の授業がとても楽しかったです！！コミュニケーションが重視されていて、たくさん英語を話せて嬉しかったです！！ありがとうございました。
- 積極的に英語を用いることで英語と親しくなれた点。
- 毎回のクイズと、宿題。
- 毎回の授業が活発で楽しかった点。
- あまり固くなく、授業の雰囲気がとてもよかった。時折はさまれたエクササイズによって、クラスメイトの仲を築くことができ、よかったと思う。
- 先生の人柄が素晴らしいと思う。授業の毎日が楽しく発見があった。「これが大学の授業なのか」と今までの高校までの授業とは異なるものであった。自然と英語で話せるこの授業は最高だと思う。
- 積極的に英語を話していきやすい雰囲気でもよかった。
- “英語で話す”ということが強く推奨され、英語を話す意識が高まると共に、コミュニケーションの楽しさを改めて思い知った。
- 先生が積極的に英語を使うように促していたこと。
- ジェフ先生めっちゃいい人だった。授業も、生徒主体の部分が多く、こういう授業が増えると良いと思う。
- コミュニケーション主体だったところ。楽しくゲームのように英語を学べたところ。とても楽しい授業だったと思う。
- 学生皆が参加できるような教育内容であった点。英語を積極的に使えるようになった。
- すばらしい、ブラボー。

## 外国語演習

### 「英語演習 中級 : Communicating Across Cultures」

メディア・コミュニケーション研究院 准教授 カイリ マーティン

#### ■ シラバス

##### 授業の目標 Course Objectives

What comes to mind when you think of the word 'culture'? For some people, it means travelling to far away places or eating delicious food. However, others think about the difficulties involved in communicating with people from different cultural backgrounds. In this course, we will explore the meaning of 'culture' and the different ways in which people communicate across cultures around the world.

##### 到達目標 Course Goals

The goals of this course are to:

1. develop a deeper understanding of intercultural communication in English;
2. develop an understanding of the relationship between language and culture;
3. develop a critical understanding of English language norms in comparison to other languages;
4. develop an understanding of the preferences for indirect and direct speech acts in different languages; and
5. develop strategies for successfully communicating in an intercultural context.

##### 授業計画 Course Schedule

The weekly topics for this course are as follows:

Week 1 – Orientation lecture: communicating across cultures

Week 2 – What is 'culture'?

Week 3 – Exploring your own culture

Week 4 – Cultural values

Week 5 – Language, culture and identity

Week 6 – Polite behavior

Week 7 – Communication styles and registers

Week 8 – Verbal and non-verbal communication

Week 9 – Gender and communication

Week 10 – Cultural stereotypes

Week 11 – Cultural Shock

Week 12 – Body language

Week 13 – Power in language

Week 14 – Diversity and ethnic differences

Week 15 – Effective communication across culture

##### 成績評価の基準と方法 Grading System

Class work (40%); Class oral presentation (20%); Logbook or final essay (40%).

Class work (40%)

All students are expected to try and use English in class. Students who actively participate in and are well prepared for class activities will receive higher marks.

Oral presentation in class (20%)

Students will need to give an oral presentation on a weekly topic in class.

Log book or Final Essay (40%)

Students will be required to write a final assignment in either a log book or essay format based on class materials, discussions and outside materials. A selection of topics will be provided in class by instructor. Details relating to how to write this assignment will be provided in class.

#### ■ 授業の取組・工夫等について

##### 1. Aims and Content

This course was designed as an introductory subject to intercultural communication around the globe. The course focussed on the visual, material and linguistic aspects of intercultural

communication from a range of different cultures and countries. The course catered to both local and international students undertaking their studies at Hokkaido University, and was conducted in the medium of English.

The course content included an exploration of some of the diverse concepts and theories in the field of intercultural communication. Students were exposed to a range of topics, which involved the notions of ‘face’ and ‘preferred behaviour’ in communication; communication styles and registers in formal and informal contexts; verbal and non-verbal communication; the marking of gender in language; construction of power relations in intercultural situations; cultural and linguistic stereotyping; and strategies for effective intercultural communication.

## 2. Teaching methods and philosophy

In this course, the students came from different language and cultural backgrounds as the course was available to both local and international students. As a result, the teaching style adopted was a student-centred approach which was tailored to meet both the language and cultural needs of the class population. In other words, my teaching style was inquiry-based in which the focus was on providing an interactive and student-driven learning environment with local needs assessment. This was especially important given that my classes were all held in the medium of English which is not the students’ first language.

I also endeavoured to use inclusive teaching techniques, utilising both verbal and non-verbal forms of language to ensure greater understanding of difficult information. In each class, the key theoretical concepts were introduced at the beginning of class often using PowerPoint slides. There was not any textbook for this course, so photocopies of slides and other course materials were provided in each class. The students were also encouraged to actively engage with the course content through small group discussions. Task-based activities were used to promote in-depth discussion and understanding of key class materials and content. These activities were often focussed around a short questionnaire; specific discussion questions; or real-life scenarios based on that week’s topic. The students would firstly discuss the task amongst themselves, and then the discussion would be opened up to the whole class with me, the teacher, as the mediator.

In addition, short videos were also utilised to teach the course content as a way of exposing the students to different intercultural communication contexts around the world and as a means of maintaining the students’ motivation and interest in the course content.

### ■ 学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 英語でプレゼンテーションをできた点。
- ・ 日本人がなかなか体験できないディスカッションが授業に多く含まれていた点。貴重な経験なる。
- ・ 内要は面白いこと。ビデオで使って説明するのはわかりやすくなってきた。
- ・ いろいろな国の人たちの多様な文化や考え方をわけあうことができとても良かった。
- ・ 担当の教員が、はば広い知識を持っているので、生徒からの質問に対してもわかりやすく答えていて、とてもいい授業だった。そもそも国際色あふれる生徒が参加するので、よい刺激になった。
- ・ 様々な人と英語で意見交換できたし、しやすい環境であった。
- ・ Love it!so fun!Enjoyable!Just the essay was painstaking.haha
- ・ 皆が積極的に発言していて、また先生も拙ない英語でも真剣に聞いてくれたので積極的に発言しやすかった。
- ・ 英語会話が十分出来た。・ 教員から適切なコメントがあった。
- ・ I learnt how to communicate with others from different cultures. I understand different cultural values and communicative skills.
- ・ The course was good in making me understand.inter culture communication.
- ・ The course and the teacher is good and complete enough.
- ・ Text books and further reading should be approved.
- ・ 本当に楽しく、興味が深まる授業でした。ありがとうございます。
- ・ She has a strong Australian accent in English. It’s just okay because She is australian. But some times it was difficult for me hearing it for I’ve studied American English.
- ・ The teacher was kind and good enough.
- ・ The professor was very frindly in teaching.

## 基礎科目

### 「化学 I」

先端生命科学研究院 助教 中島 祐

#### ■ シラバス

##### 授業の目標 Course Objectives

化学は、多種多様な物質の性質・機能や生命現象の仕組みを系統的に理解するための学問である。化学 I では、あらゆる物質の構成単位である原子・分子についての基礎的な理解を深める。具体的には、原子の電子構造とそれに由来する元素の特性、化学結合の本質、物質の状態、化学エネルギー等をまなぶ。

##### 到達目標 Course Goals

1. 原子の構造：原子構造と周期律について量子力学の立場から説明できる。
2. 化学結合：混成軌道の概念にもとづいて  $\sigma$  結合と  $\pi$  結合、分子の形を説明できる。
3. 軌道エネルギーと吸収スペクトル：物質の色と軌道エネルギーの関係を説明できる。
4. 固体の構造：分子性結晶、イオン結晶、金属の違いを説明できる。
5. 物質の三態：気体、液体、固体の性質と相変化を説明できる。
6. 電解質溶液：イオン化傾向を電池の起電力によって説明できる。

##### 授業計画 Course Schedule

1. 原子の構造
2. 化学結合：混成軌道 ( $sp$ ,  $sp^2$ ,  $sp^3$ )、 $\sigma$  結合と  $\pi$  結合
3. 軌道エネルギーと吸収スペクトル
4. 固体の構造
5. 物質の三態
6. 電解質溶液の化学反応

##### 成績評価の基準と方法 Grading System

受講状況、レポート、および試験の成績により、下記の点から総合的に評価します。

1) 基礎的知識を正確に理解しているかどうか、2) 積極的に参加して問題意識を深めたかどうか、3) 出席状況など。評価は相対評価をとっており、秀・優・良・可および不可の比率は、15% : 30% : 40% : 15% 程度を目安とします。やむを得ず欠席する場合は届けを出してください。

#### ■ 授業の取組・工夫等について

H24 年から化学 I を担当しており、H25 年は私にとって 2 回目の授業でした。まだまだ試行錯誤の毎日ですが、初年度から改善したことを学生に評価して頂き、嬉しく思っています。若輩者の身で大変僣越ではありますが、工夫していることを紹介させていただきます。

化学 I では、量子化学、熱力学の基礎を扱っています。現象論が中心の高校化学に比べ、物事の本質に踏み込む大学化学は極めて難解であり、自分も学生時代は全然理解していなかった覚えがあります。本授業にあたっては、「自分が大学 1 年生だとして、理解、納得が出来る授業であるか？」ということを常に考えながら準備を行いました。

講義は主にパワーポイントで行い、スライドは授業開始時に全て配布しています。これは、ノートを取ることに気を取られて話を聞きそびれ、授業についていけなくなる、という事態を防ぐためです。ノートを取らせた方が学生の身になる、という意見もありますが（私も初年度の当初はそうしていました）、スライドを配布した方が学生に理解してもらえます。本来は、配布スライドの重要な部分を空白にし、そこを授業中に書き込んでもらう形が望ましいと考えていますが、準備時間の関係でまだそこまでは行えていません。

講義は、前回の復習と質問回答（10分）→授業前半（35分）→休憩（5分）→授業後半（30分）→小テスト+感想・質問記入（10分）という流れで行っています。最初に復習を入れることで、前回授業の要点を思い出してもらい、今回の内容にすんなり入れるようにしています。授業途中では5分の休憩を取りますが、これは90分の授業では学生の集中力を保つのが難しいので、途中でリフレッシュさせて集中力を維持させることを

狙っています（法学部の池田清治先生の授業を参考にさせて頂きました）。最後の小テスト＋感想記入の主な目的は、理解度を測ること、また忌憚ない質問、感想、意見を吸い上げることです。全ての質問・感想は、次回の授業始めに紹介し、それぞれにコメントをつけています。直接は聞きにくい質問・疑問も、紙に書かせると書いてくれます（元理学部（現山形大）の古川英光先生の授業を参考にさせて頂きました）。理解度が十分でないと感じた時は、同じ内容を違う説明で再度教えることもあります。その他、学生からの意見は授業に反映させています。

授業本体では、「真に使える知識」を身に付けさせることに注力しています。様々な理論や式を、ただ「こういうものがある」と教えるだけでは、試験が終わったら忘れてしまうような、上辺だけの知識になりがちです。そこで、ある理論を教える時には、同時にそれが生まれた理屈や背景、その理論に関わる面白い現象などをなるべく順序立てて、丁寧に紹介することで、学生が真の意味で理解できるように心掛けています。また学生がとっつきやすくなるように、スライドには図や映像を多用して視覚的に分かりやすくし、スライド中の文章や話し方はくだけたものを用いています（多少、正確性は犠牲となりますが）。

成績は、小テスト3割、中間3割、期末4割で評価しており、テストでは、自筆のA4以内の紙1枚の持ち込みを認めています。多岐にわたる授業内容をA41枚にまとめるという作業を通して、これまでの知識を整理してもらうことが主な目的です。持ち込み可ではありますが、本質的な理解を問う記述問題が多く出題されますので、しっかり授業を理解していなければ高得点は出ないようになっています。

#### ■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・先生の生徒に対する配慮がととてもすばらしいと思います。
- ・先生がやさしかった！
- ・生徒が勉強しやすいような状況にしてくれたのでよかった。
- ・途中の休憩がすばらしかった。生徒の意見・質問にきちんとこたえていた。
- ・毎回の授業の最初に前回の授業の復習、最後にその授業のまとめがあって、身に付きやすい授業構成でした。小テストや授業内の演習もありがたかったです。
- ・プロジェクター、黒板やレジメを適切に利用した授業で分かりやすく、テスト前の復習もやりやすかった。また、授業後に質問アンケートを実施し、授業の評価や授業内容についての質問内容を紹介していたのはよかった。
- ・授業途中の休憩、復習（授業開始直後に前回の分の）
- ・学生の感想が取り入れられた点。少し奇抜な感想も取り入れてくれた点。
- ・先生の説明やプリントがとても分かりやすかった。
- ・スライドや化学を用いて作った実物を持ってきたりとよかったと思う。
- ・集中力を維持できるように構成されていた点。
- ・分量がほどよかった点。
- ・すべて最高でした！！
- ・先生が最高だった。
- ・先生のおかげで化学がよくなりました。ありがとうございます。
- ・スライドがよかった。
- ・スライドが見やすい。
- ・分かりやすかった。
- ・面白かった。
- ・テストが持ち込み可なところ。
- ・カラーのレジメを配ってくれたりしたので、復習がしやすかった。色々授業をおもしろくする工夫をしてくれてよかった。
- ・スライド、説明が解りやすかった。スライドをネット公開しているのもよかった。
- ・全体的におもしろかった楽しかった。
- ・難しすぎなくてよかった。
- ・先生がとにかくすばらしい。すばらしいの一言に尽きる。
- ・点心。
- ・とても楽しくべんきょうできました。
- ・先生が素晴らしい。
- ・授業の形式が切り替えやすく良かったです。
- ・先生がすばらしかったです。
- ・先生好きだー！！